

命を守る 思いは一緒

女川と御巢鷹つながらる縁

14年前、息子は働いているさか
かに東日本大震災の津波にのまれ
亡くなった。両親は二度と同じ犠
牲を出さないために企業と向き合
い、体験を語り続けて



「職場は安全な場所だ
と思っていた。自然災害
と納得することはできな
かった」。2月8日、専
修大学神田キャンパス
(東京都千代田区)で開
かれた労働災害について
考えるフォーラム。主催
した田村孝行さん(64)と
弘美さん(62)は、長男の
健太さん(25)に
平成23年3月11日、健
太さんは、七十七銀行女

(大渡美咲)



群馬県上野村の御巢鷹山に美谷島邦子さん(右から2人目)と登る田村孝行さん(左)と弘美さん(左から2人目)＝田村さん提供



2月には労働災害で子供を失った遺族によるフォーラムを主催した。左から田村弘美さん、孝行さん、高橋幸美さん、佐戸恵美子さん、守さん＝東京都千代田区(大渡美咲撮影)



川支店(宮城県女川町)で勤務中、支店長の指示で2階建ての屋上に避難したが、津波に襲われ4人が死亡し、現在も8人が行方不明だ。海の近くにあった町内4つの金融機関の従業員は山に逃げるなどして全

長男失った夫妻「企業と向き合い語り続ける」

員無事だった。
「なぜ七十七銀行女川支店だけが屋上に逃げたのか」
救えたはずの命が失われた理由とは。何度も銀行に説明を求めたが、納得できる回答は得られなかった。
ある本との出会い
平成27年、2人はある本と出会った。
『御巢鷹山と生きる―日航機墜落事故遺族の25年―』。昭和60年の日航ジャンボ機墜落事故で当時9歳の息子を亡くした美谷島邦子さんが書いた本だ。遺族が日航とどう向き合い、日航がどう変わっていったのかがつぶさに書かれていた。
「大企業と向き合い、子供の命をどう生かすかが書かれ、ものすごく刺さった」と孝行さん。
美谷島さんに手紙を書いたその年の8月12日、群馬県上野村にある御巢鷹山への慰霊登山をともにした。二度と大切な命が奪われてほしくないという思いは一緒だった。銀行にもこうした形で遺族や震災に向き合っしてほしいと思った」と弘美さんは振り返る。
脱線事故現場にも
それ以降、毎年、御巢

鷹山に登っている。乗客ら107人が死亡した平成17年のJR福知山線脱線事故の遺族とも出会い、兵庫県尼崎市の事故現場にも足を運んだ。
「会って話して聞いてみたいと分らないことばかりだった。自分たちが遺族になるまですべてひとごとだったことにも気づいた」と孝行さん。
令和5年には、仕事に交通事故や災害、事件に巻き込まれるなどして子供を亡くした家族との交流も生まれた。今年2月のフォーラムに登壇した2家族との出会いもあった。長時間労働やパワハラに苦しみ自ら命を絶った広告大手電通の新人社員、高橋まつりさん(当時24)の母、幸美さんやNHK記者だった佐戸未和さん(当時31)を過労死で亡くした母の恵美子さんらだ。
思いを共有する中で、大切な命が失われた問題の根本には企業のあり方

や風土があったのではな
いかと考える。二度と同じ悲しみを生まないためにも、田村さん夫妻は訴え続ける。
「企業は一人一人の力で成り立っている。本気で従業員の命を守る人命第一の企業文化が根付いてほしい」